限局性学習症の日常生活に目を向けて

～　教科学習以外で生じる困難と支援　～

企　画　者　：　藤岡　徹（福井大学）
司　会　者　：　平谷　美智夫（平谷こども発達クリニック）
話題提供者　：　平谷　美智夫（平谷こども発達クリニック）
石坂　郁代（北里大学医療衛生学部）
河野　俊寛（金沢星稜大学）
伊藤　一美（星槎大学大学院教育学研究科）
指定討論者　：　藤岡　徹（福井大学）

【企画の趣旨】

発達障害の症状（言い換えれば困難さ）は自己理解や補助代替手段の獲得に伴って目立たなくこともあるが、特性自体は生涯継続するものである。限局性学習症（SLD）の特性は様々な場面で目立つものであり、休み時間や帰りの会、宿題を含めた家庭やその他の社会的活動も含めて SLD 児は様々な困難を示すのである。河野（2015）は学齢期に読み書き困難があった成人の症例を報告していて、「友達と漫画の回し読みをすると自分ひとりだけペースが遅く、とても気まずかった」「本一冊を読破するのに半年かかり、とても疲労感を感じていた」などと教科学習以外で場面でのエピソードも挙げられていた。適切な支援や配慮が受けられなかったことによる語彙獲得の遅れ（国際 dyslexia 学会; 宇野訳, 2007）や自尊心の低下（McNulty, 2003）などの 2 次的な問題はよく知られるが、このように SLD の特性が学習場面以外の日常生活に負荷を与えていることも推測される。

SLD 特性のある当事者に、教科学習場面以外の場面（家庭、休み時間、帰りの会、特別活動など）で合理的配慮が提供されること、上述の場面に直結した指導が提供されることを願ってこのシンポジウムを企画した。ただし、読字障害のある児童に注意欠如多動症（ADHD）や自閉スペクトラム症（ASD）が高率で並存するように（藤岡ら, 2014; Asberg et al., 2006）、そのエピソードが他の発達障害特性で生じている可能性もあり、それらは分けて考えられるべきである。そこで、最初に SLD と ADHD と ASD の併存とその臨床像について医学的な立場から総論を述べる。その後、読字障害、書字障害、計算障害の教科学習以外での場面で生じうる困難と支援について、それぞれの専門家が説明をする。なお下記文章で、統計は福井大学医学部倫理委員会の承認を得て実施した研究の一部であり、エピソードなどに関しては個人を特定できないように一部改変するなど留意して記載した。

「限局性学習症・注意欠如多動症・自閉症スペクトラム障害の相互関係」

平谷　美智夫

近年当クリニックで発達性ディスレクシア（読字障害 ; 以下 DD）の診断が急増している（2016.12 時点で 300 例を超えた）。増加の要因は、①稲垣らの特異的発達障害：診断・治療のための実践ガイドラインの完成　②就学児童では読み書き評価をルーチン化した　③啓蒙活動が進み読み書きの問題で受診する児童が増加　などと考えている。2015.6 までに DD と診断された 224 例につきその背景因子をまとめた。(　) は症例数。年間診断数 : 2001～2006（10 以下）、2007～2011（12～20）、2012～2014（25～34）、2015（40＞）。男/女 187 : 37。併存症 : ADHD(124)、ADHD 疑い(48)、ADHD(疑い含む)+ASD(93)、ASD(29)、DD 単独(23)。IQ：101≦（39）86～100(83)、71～85(71)、70≧(25)(知的レベルと DD と綜合判断)、不明（6）。就学前に受診し就学後に DD と診断された例（24）きょうだい例（きょうだい 2～3 名がクリニックで発達障害と診断され、少なくとも 1 名が DD）(32 組)【まとめ】①男児が多い②DD 単独例は少ない③併存症では ADHD が多く ASD のみの併存は少なく ADHD＋ASD が多い④言葉の遅れ（2 語文の遅れ）は ASD 併存群の 71.4％と高かった。DD に観察される困難さや問題行動には ADHD･ASD に由来する問題も多いことを認識しておく必要がある。

「読字に困難がある子どもの日常生活への支援」

石坂　郁代

読字には，音読と読解がある。音読に苦手さがある場合，授業以外ではほとんど音読の機会はないので，大変なのは宿題であろう。音読の宿題が出るとなるべくならやらないで済ませようとする。親が「音読の宿題は？」と聞くと「今日はない」とか「もうやった」などと答え，親が見ているところでは読もうとしないということがある。読解が苦手だと，読み聞かせは大好きで読んでもらいたい本を持ってくるのに，自分では本を読まない，絵や図のある本ばかり見ているということが多い。おもちゃを組み立てる時に説明書を読まずに図だけを見て作成したり（それで完成できればよいわけだが），買い物リストを渡されても目的の商品を探すのに時間がかかったりする。また，（積極的に文字を読もうとしないので）掲示物に気がつかなかったり，案内を見落としたりすることもある。楽譜が読めない場合は，耳だけで曲を覚えたりする。しかし高校生ぐらいになると，映画は字幕を読むのに時間がかかるので吹き替え版を見る，長い文章は要点だけを拾おうとする，ニュースは携帯で写真付きのものを見る，等の工夫に進化する。（失敗を重ねながらも）このように日常生活にうまく対応できるようになることを支援することができればよいと考えている。

「書字に困難がある子どもの日常生活への支援」

河野　俊寛

書字に困難がある状態は，すらすらと正確に書けない状態である。そのような困難があっても，家庭や地域での日常生活では，書く機会は学校生活ほど多くないので，学校の教室場面ほど困ることはないかもしれない。しかし，知りたいことをインターネットで調べようとした時に，単語を正確に入力できなくて，結局わからないままにしておく，という事例はある。そのような状態が続くと，わからないこと，知らないことをそのままにする習慣がついてしまい，知識が増えない，ということになるかもしれない。また，書く必要のある宿題をめぐって，保護者との関係が悪くなっている事例は多い。宿題を前にして，保護者も子どももイライラとして，保護者は叱り続けるだけになり，子どもは暴言を吐くようになってしまい，子どもの自尊感情が低くなっている相談を受けたことがある。このような場面で，書字の困難を補助代替する方法を知っていれば，苦労せずに取り組むことができる。音声入力を使ってキーワードを入力してインターネットで調べている子どもは実際いる。自由学習は，音声録音を使って，あるいは，パソコンのワープロで入力して提出している子どもがいる。このシンポジウムでは，書字困難を補助代替する方法を中心に紹介したい。

「計算に困難のある子どもの日常生活での支援」

伊藤　一美

計算の困難さは、他の子どもがパッと暗算できるような計算がすらすらできないことにある。その背景には、DSM-5 によると、他の子どもが暗算できるような計算問題で、数えるというような計算方略を使用し続ける特徴があること、筆算の手続きがスムーズに処理できないことが指摘されている。このつまずきは、単なる繰り返し学習だけでは、なかなか改善するものではないと考えられている。したがって、計算ドリルは苦痛に感じてしまうことが予想される。また、日常生活においては、1000 円でどのくらいお菓子を買うことができるのか、おつりはいくらになるのか、ということがパッと計算できないというような困難さが予想される。計算が苦手な子どもの中には、お買い物では必ず大きな金額のお札しか使用しないというようなことも聞かれる。このような症状は、年齢が高くなっても、続いてしまうものなのだろうか。本シンポジウムでは、電卓を使用するという代替手段以外に、計算の能力として重要な概算の能力をどのように育てるのかということについて、論じたい。

キーワード：限局性学習症，併存症，臨床像